

# 『源氏物語』 六条院における玉鬘

## —夕顔と明石の君との比較を発端として

山 村 桃 子

On the Existence of *Tamakazura* in Rokujo-in in "The Tale of Genji"

Momoko YAMAMURA

### 1. はじめに

『源氏物語』玉鬘巻において、夕顔の侍女であった右近が、もし夕顔が生きていれば明石の君に並ぶ存在であったらと述懐する箇所がみられる。

a 心よくかいそめたるものに女君も思したれど、心の中には、故君ものしたまはましかば、明石の御方ばかりのおぼえには劣りたまはざらまし、さしも深き御心ざしなかりけるをだに、落としあぶさず取りしたためたまふ御心長さなりければ、まいて、やむごとなき列にこそあらざらめ、この御殿移りの数の中にはまじらひたまひなまし、と思ふに、飽かず悲しくなむ思ひける。  
(③玉鬘87頁)<sup>1)</sup>

そして光源氏もまた同様のことを考える。玉鬘の居所を定め、紫の上に夕顔との経緯を語る時、もし夕顔が生きていれば明石の御方とどうして同列にみないことがあろうかと語る。

b 「おのづからさるまじきをもあまた見し中に、あはれとひたぶるにらうたき方は、またたぐひなくなむ思ひ出でらる。世にあらましかば、北の町にもものする人の列にはなどか見ざらまし。人のありさま、とりどりになむありける。

かどかどしう、をかしき筋などは後れたりしかども、あてはかにらうたくもありしかな」などのたまふ。(紫の上)「さりとも明石の列には、立ち並べたまはざらまし」とのたまふ。なほ北の殿をば、めざましと心おきたまへり。

(③玉鬘126頁)

このように、玉鬘が六条院に登場するにあたり、その亡き母である夕顔が回想され、「世にあらましかば」という仮想が語られている。その時、右近と光源氏がともに準えるのが北の町に住む明石の君の待遇である。

この点についてはこれまで、「右近が心にも、夕顔上今世に物し給はば、明石の上の御おぼえほどには有りぬべきよし、上の詞に見えたり。源氏の君もさのたまふ也」(花鳥余情)、「右近はこの源氏の気持ち (b 傍線部一引用者注) を知っていたか。夕顔の父は三位中将で、明石の君より家柄はよい」(新編全集)と指摘される。

六条院の中でも紫の上や花散里、秋好中宮ではなく、なぜ夕顔は明石の君の待遇と重ね合わせられるのだろうか。両者の共通性は、むしろ玉鬘を通して理解することが可能であるように思われる。本稿では、亡き夕顔の娘・玉鬘と明石の君の関係および明石の姫君や紫の上との関係について考察したい。

## 2. 「海人」と「山がつ」

夕顔と明石の君の係りに着目する論として吉海直人氏の論<sup>2)</sup>がある。右近が光源氏にとっての夕顔の身代りを務めてきたことを推測する三田村雅子氏の論<sup>3)</sup>をふまえ、六条院において「幸ひ人」とされる明石の君を右近は意識したとする。夕顔の父と明石の入道の身分により、夕顔と明石の君は「身分的には対等」であり、「今度は夕顔からスライドされた玉鬘に、現実として明石並の処遇を期待するわけである」とされる。

まず、aの右近の言う「やむごとなき列」とは、宮家もしくは大臣家を出自にもつ秋好中宮、紫の上、花散里であると考えられる。紫の上は兵部卿宮の、秋好中宮は前坊の娘であり、花散里の父は示されないうが、麗景殿女御を姉にもつため、大臣家の出であると思しい。こうした女君の中で、明石の君の出自は六条院の中で最も低いものである。

明石の君の父・入道は播磨の受領であったが、以前は近衛中将でもあった。夕顔もまた、故三位中将の娘であり、両者の本来の身分は同程度であるといえる。そのため、夕顔が存命であれば、最低限明石の君の処遇程度にはと考えられたのだろう。

しかし、夕顔と明石の君の比較の視点は、むしろ後の物語の展開、玉鬘の物語の展開によって右近にもたらされた可能性があるのではないだろうか。

この述懐が玉鬘十帖の冒頭において語られることに注目したい。右近は玉鬘巻において多大な活躍をするものの、その後は殆ど動きをみせることがない。従って玉鬘十帖における右近の物語的役割は、亡き夕顔を媒介に、玉鬘を六条院に参入させることに尽きるといえる。述懐を発端に、玉鬘の受難、初瀬での出会いと、玉鬘巻における物語の予定調和性は顕著であった。そうした物語の構想と右近は不可分に結びつきをもち、玉鬘の受難の物語に先立つ右近の述懐は、その後登場する夕顔の遺児・玉鬘の流離の人生を、物語において予見させるものといえるのではないだろうか。

田舎で生い立ち、六条院に迎えられる女君のさがけとして、既に明石の君が存在していた。玉鬘と明石の君は、ともに都を離れた鄙に育ち、のち上京

し六条院に迎えられるという、周縁から中心への共通の軌跡を辿る。

《明石の君》明石一大堰一六条院

《玉鬘》肥前一長谷一八幡・九条一六条院

こうした環境に関わって、表現の面においても両者にはいくつかの共通項がみられる。明石巻や玉鬘十帖には、二人の女君に関わって「海人」や「山がつ」<sup>4)</sup>といった語が散見するように、両者の育った環境は「みやび」とは程遠い田舎である。明石の君と海人との関係については夙に津島昭宏氏により指摘され、「海人」や「山がつ」という民衆の回路を有し、海や山という自然を包摂していくことで、光源氏の栄華・王権が築かれていく<sup>5)</sup>とされる。ここでは、明石の君と玉鬘双方に共通する特徴としてこうした表現がみとめられるため、用例を挙げて確認したい。

c かくて後は、忍びつつ時々おはす。ほどもすこし離れたるに、おのづからもの言ひさがなき海人の子もや立ちまじらんとし憚るほどを、さればよと思ひ嘆きたる (②明石258頁)

d かくまで世にあるものと思したづぬるなどこそ、かかる海人の中に朽ちぬる身にあまることなれ、 (②明石254頁)

e 前の世の契りつたなくてこそかく口惜しき山がつとなりはべりけめ、親、大臣の位をたまちたまへりき。みづからかく田舎の民となりてはべり。 (同)

f うらめしやおきつ玉もをかづくまで磯がくれける海人の心よ  
よるべなみかかる渚にうち寄せて海人もたづねぬもくづとぞ見し (③行幸317頁)

g 「…山がつめきて生ひ出でたれば、鄙びたること多からむ。さるべく事にふれて教へたまへ」 (③玉鬘127頁)

c では、光源氏は明石の君の許に通うことが人に知られないように気兼ねして途絶えがちにもなる。「海人」とはここで明石に住まう人々、つまり田舎

人という意味である。dでは、明石の君自身が「海人の中に朽ちぬる身」と田舎の中で一生を終えることを自虐として捉える。eでは、明石の入道が大臣の位を棄て「田舎の民」となったことについて「口惜しき山がつ」と捉えている。

f gは玉鬘に関する用例で、fで玉鬘の装着の際、内大臣が身を隠していた玉鬘を「磯がくれける海人」に喩え、光源氏は玉鬘を「海人もたづね」てくれなかったのだと答える。また、光源氏が花散里に後見を依頼する際、玉鬘のことを「山がつめきて生ひ出で」たので、田舎びたところもあるだろうと述べる。

このように、「海人」「山がつ」は田舎者を代表する表現であり、女君としては明石の君・玉鬘の両者に対して用いられた。そして、かつての夕顔も自身を「海人の子なれば」(①夕顔162頁)と表現した。「海人の子」に喩えることは、次の引歌によって自身が宿を定めない流離者であることを意味している。

白波の寄する渚に世を過ぐす海人の子なれば  
宿も定めず 海人詠  
(『和漢朗詠集』巻下 遊女)

夕顔は、夫・頭中将の北の方から逃れるため、西の京に住む乳母のもとに隠れていた。しかし住みわびて山里に移ろうとし、その年が方塞がりであったため、五条の家に仮住みをしていた。夕顔の流離的性格が娘の玉鬘にも受け継がれる<sup>6)</sup>。そしてその夕顔の引歌を現実化するべく、娘玉鬘は筑紫に育ち、船旅を経て上京する。また、明石を出て、揺れ動く心情の中で一旦大堰に留まる明石の君のあり方も、またひとつの流離といえるだろう。

### 3. 「蛭の子」と「罪深き身」

光源氏は、須磨・明石での三年の流謫生活を「蛭の子の脚立たざりし年」と表現した。

h わたつ海にしなえうらぶれ蛭の子の脚立たざり  
し年はへにけり (②明石274頁)

蛭子とは国生み神話における手足の萎えた子であ

り、『日本書紀』では、「先ず蛭子を生みたまふ。便ち葦船に載せて流しやりき」(第四段一書第一)、「次に蛭子を生みたまふ。此の児年三歳に満つるも、脚尚し立たず」(第五段一書第二)と記される。後者をふまえた大江朝綱の歌「かぞいろはあはれと見ずや蛭の子は三年になりぬ足立たずして」(『日本紀竟宴和歌』)がhと次のiの出典とされる。

明石の君と玉鬘に共通する性格のいま一つに、この「蛭の子」の表現がある。

i (明石の姫君を) ここにてはぐくみたまひてんや。蛭の子が齢にもなりにけるを。罪なきさまなるも、思ひ棄てがたうこそ。(②松風423頁)  
j 「脚立たず沈みそめはべりにける後、何ごともあるかなきかになむ」とほのかに聞こえたまふ声ぞ、昔人にいとよくおぼえて若びたりける。ほほ笑みて、「沈みたまへりけるを、あはれとも、今はまた誰かは」とて、心ばへ言ふかひなくはあらぬ御答と思す。(③玉鬘130頁)

iでは明石の姫君が三歳になったことを「蛭の子が齢」と表現する。いずれも明石の地で暮らすことが「蛭の子」の表現につながる。jでは、玉鬘が光源氏と初めて対面する際、「脚立たず沈みそめはべりにける後」と筑紫での生活を表現する。「沈む」は、のち豊後介が筑紫での生活を「年ごろ田舎び沈みたりし心地」(玉鬘133頁)と表現することから、田舎でのうらぶれた暮らしを意味する。

このように「蛭の子」は、脚が立たないとされることから都人の視点からのうらぶれた暮らしを、また葦船に入れて流されることから流離を示す表現と考えられる。前節の「海人」「山がつ」と併せて、玉鬘と明石の君には、鄙の環境と流離的性格を示す表現が多用されているといえる。明石が「もの言ひさがなき海人の子もや立ちまじらん」といった空間に描かれるのと同様、夕顔や玉鬘のいる空間とは、「むつかしげ」「らうがはしき」と幾度も形容される五条大路の雑踏であったり、「あやしき市女、商人」がいる九条のあたりや椿市といった、人々が行き交う雑踏であった。

しかし、田舎育ちにも拘わらず、二人はそれに染まない上品さを共に有する女君であった。夕顔は「またなくらがはしき隣の用意なさを、いかなることとも聞き知りたるさまならねば、なかなか恥ぢかかやかんよりは罪ゆるされてぞ見えける」(①夕顔156頁)と、粗末な環境とは相容れない育ちの良さを有する。また光源氏ははじめ明石の君を「こようなうも人めきたるかな」(②明石257頁)と見くびりながらも、実際の逢瀬によって、「人ざまいとあてにそびえて、心恥づかしきけはひぞしたる」(同)その高貴な様子に惹かれた。

そうした両者が光源氏と出会う機運を得たのは、いずれも神仏の力による。明石一族は従来住吉神を厚く信仰しており、玉鬘一行は石清水八幡宮、長谷寺と次いで参詣した。

滯標巻における住吉参詣の折、光源氏の参詣を知らなかった明石の君は、次のkの箇所において、「何の罪深き身にて」光源氏の参詣も知らずに出立したのだらうと激しく内省する。この表現は玉鬘にもみられる。

k さすがにかけ離れたてまつらぬ宿世ながら、かく口惜しき際の者だに、もの思ひなげにて仕うまつるを色節に思ひたるに、何の罪深き身にて、心にかけておぼつかう思ひきこえつつ、かかりける御響きをも知らで立ち出でつらむ、など思ひつづくるに、いと悲しうて、人知れずしほたれけり。(②滯標303頁)

1 「いかなる罪深き身にて、かかる世にさすらふらむ。わが親世に亡くなりたまへりとも、我をあはれと思さば、おはすらむ所にそさひたまへ。もし世におはせば御顔見せたまへ」

(③玉鬘104頁)

1は玉鬘の長谷寺参詣の折、「いかなる罪深き身にて」とさすらいの身である自身を嘆き、親との対面を仏に念じる。両者共に、自身を「罪深き身」と捉えて前世における因縁の拙さを嘆き、神仏に祈るのである。こうした甲斐あって二人は六条院へと迎え入れられる。女君が身分の低さを克服し、異例の

幸福を手に入れる物語的方法として、神仏の靈験はあったといえる。

このように、明石の君と玉鬘を取りまく環境や動き、表現には共通項が多くみられた。『源氏物語』の展開に即していえば、田舎に生まれ育った明石の君の精神的流離の主題が新たに捉え直されて、玉鬘十帖では現実的な市井における玉鬘の流離が描かれたといえるのではないか。ここに明石の君から玉鬘へという女君の造形の展開をみるのが可能であると思われる。

#### 4. 玉鬘と明石の姫君—六条院の姫君

右近が夕顔と明石の君を準えることは、玉鬘十帖に展開する次の構図をも示唆的に提示していると考えられる。

〈母〉            〈娘〉

夕顔 ————— 玉鬘

|                    |

明石の君 ——— 明石の姫君

右近は玉鬘を六条院に呼び込む存在であり、その発端としての述懐が先の「故君ものしたまはましかば、明石の御方ばかりのおぼえには劣りたまはざらまし」であった。その反実仮想を現実化するのが、夕顔の娘・玉鬘である。過去にとられる右近をよそに、既に時は夕顔の次の世代へと移行しつつあった。

ここで、母同士の対応のみならず、新たに六条院へと参入する玉鬘に対応的な存在としてあるのは明石の姫君である。玉鬘一行と邂逅した右近は、乳母に対して次のように話す。

おぼえぬ高きまじらひをして、多くの人をなむ見あつむれど、殿の上の御容貌に似る人おはせじとなむ年ごろ見たてまつるを、また生ひ出でたまふ姫君の御さま、いとことわりにめでたくおはします。かしづきたてまつりたまふさまも、並びなかめるに、かうやつれたまへるさまの、劣りたまふまじく見えたまふは、ありがたうな

む。大臣の君、父帝の御時より、そこらの女御、后、それより下は残るなく見たてまつりあつめたまへる御目にも、当代の御母后と聞こえしと、この姫君の御容貌とをなむ、『よき人とはこれをいふにやあらむとおぼゆる』と聞こえたまふ。見たてまつり並ぶるに、かの後の宮をば知りきこえず、姫君はきよらにおはしませど、まだ片なりにて、生ひ先ぞ推しはかられたまふ。上の御容貌は、なほ誰か並びたまはむとなむ見えたまふ。殿もすぐれたりと思しためるを、言に出でては、何かは数への中には聞こえたまはむ。『我に並びたまへるこそ、君はおほけなけれ』となむ戯れきこえたまふ。見たてまつるに命延ぶる御ありさまどもを、またさるたぐひおはししなむや、となむ思ひはべるに、いづくか劣りたまはむ。ものは限りあるものなれば、すぐれたまへりとして、頂を放れたる光やおはする。ただこれを、すぐれたりとは聞こゆべきなめりかし」とうち笑みて見たてまつれば、老人もうれしと思ふ。(③玉鬘113頁)

紫の上や幼い明石の姫君の美しさに、玉鬘は引けを取らないと右近は言う。また、藤壺と明石の姫君が美人の代表とされるが、藤壺は見たことがなく、明石の姫君はまだ幼い。頂点としてある紫の上も「ものは限りあるもの」であるため、玉鬘は優れて劣らないと言う。夕顔亡き後の主人、紫の上の容貌を比類なく思う右近であるが、一方で抱いていた「はしたなきまじらひのつきなくなりゆく身」(③玉鬘106頁)への思い悩みを一気に解放するべく、夕顔の形見としての玉鬘を、紫の上に比肩する存在として新たに賞賛するのである。

高木和子氏が、当初の紫の上の辿った経緯が六条院参入後の玉鬘の造型と重なることを指摘し、「紫の上と玉鬘との間に、明石の君と夕顔との間に、明石の姫君と玉鬘との間に、そして末摘花も、朧月夜も、かの藤壺までも、と多様な人物間に比較が重層化されている。(中略)玉鬘という新たな人物の導入は、その造型が、あるいは娘として、あるいは女として、光源氏に向き合えるために、光源氏と女た

ちとの多様な関係をそれぞれに照射し反芻する契機たりえている」<sup>7)</sup>とされるように、それぞれの女君たちとの関係を多様な角度から反芻し得る存在が玉鬘であった。

右近や光源氏による明石の君・夕顔の比較は、玉鬘十帖における明石の姫君・玉鬘の娘同士との対応関係に繋がる。両者は、玉鬘十帖及び梅枝・藤裏葉巻の六条院の空間において対応的に描かれている。

「きよら」と形容される人物は多いが、両者もまた「きよら」なる形容を与えられる。玉鬘の筑紫下向の際に「いとうつくしう、ただ今から気高くきよらなる御さま」(③玉鬘89頁)と描写され、明石の姫君もまた、「姫君はきよらにおはしませど、まだ片なりにて」とされたように、互いに幼児期から「きよら」なる最上級的美質を有した姫君として設定される。

玉鬘は尚侍として冷泉帝に、明石の姫君は后がねとして今上帝に入内する計画が立てられていた。きよらなる二人は共に天皇の妻となるべき女性として予定される。

その入内を前に、行幸巻では玉鬘の裳着がおこなわれ、腰結役に実の親である内大臣が選ばれた。帝の大原野行幸の後に裳着の仕度がすすめられ、帝の寵を得ることが予想された。

玉鬘十帖の後、梅枝巻によって物語は再び紫上系に戻ると、次は明石の姫君の裳着の仕度が「御裳儀のこと思しいそぐ御心おきて、世の常ならず」(③梅枝403頁)と始まる。裳着の腰結役には秋好中宮が選ばれ、「後の世の例にや」と中宮の腰結役は前例がなかった。かつて玉鬘と同様に、「蛭の子」に準えられた明石の姫君は、光源氏の周到な計画とそれに伴う明石の君の忍従、さらに紫の上の養育によって「蛭の子」を脱却し、新たな中宮に相応しい資質を身につける。

このように、六条院の姫君は共に裳着を迎える立場ながら、その辿る道は同一ではない。長編物語の中で、明石の姫君誕生の前史としての、光源氏と明石の君が積み上げてきた時間は、夕顔のそれとは比較にならないものであった。

玉鬘十帖及び梅枝・藤裏葉巻では、明石の君と明

石の姫君二代にわたる六条院の繁栄の礎とその永遠性が作品の本筋として描かれることを背景に、母夕顔との断絶した関係をもつ玉鬘の物語は、六条院を俄に彩るものとして挿入的な位置づけにあるといえる。

## 5. 夏の町と春の町

最後に、六条院における町ごとの関係において玉鬘を考えたい。玉鬘十帖において、六条院は紫の上と明石の姫君が暮らす春の町を中心として描かれる。そうした中、光源氏が玉鬘の後見を依頼する際、花散里は「姫君の一とところものしたまふがさうざうしきに、よきことかな」と光源氏他に姫君がいたことを喜び、退屈の慰めになると言い後見を承諾した。これによって春の町には明石の姫君、夏の町には玉鬘とそれぞれに姫君が住まうことになる。

蛩巻では、端午の節句における馬場殿の競射が花散里の準備によって行われた。

おほかた、何やかやとも側みきこえたまはで、年ごろかくをりふしにつけたる御遊びどもを、人づてに見聞きたまひけるに、今日めづらしかりつることばかりをぞ、この町のおぼえきらきらしと思したる。 (③螢208頁)

これまで六条院の行事は春秋の町でしか行われず、花散里は人づてにしか知ることがなかった。そうした状況でおこなわれた競射の行事に、花散里は「この町のおぼえきらきらし」と感慨を得る。ここで、普段は光のあたることのない夏の町がはじめて、六条院の一町としての矜持を得たといえる。

この競射において殿上人の関心が注がれたのは夏の町の女童である。

西の対のなめる、好ましく馴れたるかぎり四人、下仕は棟の裾濃の裳、撫子の若葉の色したる唐衣、今日の装ひどもなり。こなたのは濃き一襲に、撫子襲の汗衫などおほどかにて、おのおのいどみ顔なるもてなし、見どころあり。若やかなる殿上人などは、目をたてつつ気色ば

む。 (③螢206頁)

西の対と花散里方の女童らがそれぞれに威勢を張り合う。美しい夏の装いの描写は、それが春秋の景物にも劣らないことを示すのではないだろうか。殿上人の視点は既に胡蝶巻にもみられた。

いつも春の光を籠めたまへる大殿なれど、心をつくるよすがのまたなきを飽かぬことに思す人もありけるに、西の対の姫君、事もなき御ありさま、大臣の君も、わざと思しあがめきこえたまふ御気色など、みな世に聞こえ出でて、思しもしるく、心なびかしたまふ人多かるべし。 (③胡蝶169頁)

「春の光を籠めたまへる大殿」の表現からは、六条院が春の町を中心とした賑わいをみせていることが窺える。しかしそこには適齢期の女君が存在しなかった<sup>8)</sup>。そこで登場した西の対の姫君は公達の「心をつくるよすが」であり、夏の町は玉鬘によって俄に脚光を浴びる。玉鬘への恋慕が増すにつれて、次第に光源氏が夏の町西の対へと渡る記述が増え、春の町と夏の町が一時期拮抗する相貌を呈していくのである<sup>9)</sup>。

六条院の二人の姫君は、初音巻における男踏歌において対面を果たす。

御方々も見に渡りたまふべくかねて御消息どもありければ、左右の対、渡殿などに、御局しつつおはす。西の対の姫君は、寝殿の南の御方に渡りたまひて、こなたの姫君、御対面ありけり。上も一所におはしませば、御几帳ばかり隔てて聞こえたまふ。 (③初音158頁)

「西の対の姫君」玉鬘は寝殿の南に渡り、「こなたの姫君」明石の姫君に挨拶する。六条院におけるふたりの姫君の対面である。行事とは、普段顔を合わせることのない女君らが交わる場でもあった。ここでの男踏歌の行事も、対立する東の町と南の町との緊張的な交渉の場としてある。

玉鬘と明石の姫君の間に対話や各々の感慨も描かれないのはなぜか。対面の際、「上も一所におはしませば」と明石の姫君と共にいる紫の上の存在に言及されることに明らかであるように、それは同時に玉鬘と紫の上の対面でもあったといえる。

玉鬘に対する紫の上の反応は次のようであった。

上、「あなわづらはし。ねぶたきに、聞き入るべくもあらぬものを」とて、御袖して御耳塞ぎたまひつ。 (③玉鬘121頁)  
曇りなく赤きに、山吹の花の細長は、かの西の対に奉れたまふを、上は見ぬやうにして思しあはす。 (同136頁)

前者では、右近が「夕顔の露のゆかり」について話題にした際、光源氏が「心知りたまはぬ御あたり」と憚ると、紫の上は眠たいので耳に入らないと言う。後者では、光源氏が女君達に正月の衣装を贈る際、玉鬘への衣装について紫の上は見ないようにしたとする。いずれも紫の上が玉鬘について明確に意識する例である。

六条院において、玉鬘は二重の存在意義を有していた。光源氏にとって玉鬘は養女であり、また恋愛の対象としての女君である。従って春の町におけるその比較の対象は、明石の姫君だけでなく紫の上に及ぶといえるだろう。そもそも、夕顔の死後は紫の上に仕えていた右近が、玉鬘を夕顔の代償として寵愛を受けさせようとするのが、紫の上に対する裏切りといわれる<sup>10)</sup>。

玉鬘と紫の上は、呼称の上で対応するところがある。玉鬘の呼称は、「西の対」や「西の対の姫君」から「西の対の御方」「対の御方」「対の姫君」へと変化する。そこには紫の上の呼称である「対の上」が意識されていると思しい。かつて二条東院においては、紫の上もまた「西の対の姫君」(②賢木103頁)と呼ばれていた。鶉飼祐江氏は、「対の上」と同じく他作品に見えない呼称である「対の姫君」を、後見がなく男君に引き取られ、大切にかしづかれて養育される女性、という本来ならば矛盾する境遇を実現した呼称であるとされる。そして玉鬘の「対の姫

君」の呼称は、「紫の上の物語を踏まえつつ新たな物語を紡ぐものであることに鑑みれば、紫の上のために作り出され、玉鬘に流用された呼称と考えられよう」<sup>11)</sup>とされた。

このように、生い立ちと、それによる呼称を共有する両者の在りようから、玉鬘の造型に紫の上がかかわることを示唆している。

一方で、玉鬘がいかに優れた資質をもっても紫の上には及ばないということは、右近によっても確かめられていた。

女君は二十七八にはなりたまひぬらんかし、盛りきよらにねびまさりたまへり。すこしほど経て見たてまつるは、またこのほどにこそほひ加はりたまひにけれと見えたまふ。かの人をいとめでたし、劣らじと見たてまつりしかど、思ひなしにや、なほこよなきに、幸ひのなきとあるとは隔てあるべきわざかなと見あはせらる。

(③玉鬘119頁)

紫の上もまた、「きよら」と形容される女君である。先の右近の乳母への話では、玉鬘が紫の上や明石の姫君の美しさに劣らないといわれた。しかし、少し見ない間にも一層増した紫の上の美しさは玉鬘のそれ以上に感じられ、「幸ひのなきとなるとは隔てあるべきわざかな」と、持って生まれた幸運の差を右近は痛感する。

『源氏物語』の中で「幸ひ人」とされるのは、紫の上と明石の君、大宮と明石の尼君である<sup>12)</sup>。玉鬘巻には「幸ひ」の例が他の巻よりもみられ、いずれも玉鬘に関わるものである。

m 「よき人の御筋といふとも、親に数まへられたてまつらず、世に知られでは何のかひかはあらむ。この人のかくねむごろに思ひきこえたまへるこそ、今は御幸ひなれ」 (③玉鬘94頁)

n 「…いと幸ひありと思ひたまふるを、宿世つたなき人にやはべらむ、思ひ憚ることありて、いかでか人に御覧ぜられむと人知れず嘆きはべるめれば、心苦しう見たまへわづらひぬる」

(同97頁)

o 右近は心の中に、「…大臣の君の尋ねたてまつらむの御心ざし深かめるに、知らせたてまつりて、幸ひあらせたとまつりたまへ」など申しけり。(同111頁)

mでは、大夫監に懐柔せられた乳母の息子が、大夫監が熱心に求婚されるのは玉鬘にとって「幸ひ」であると言う。また大夫監に対して乳母は直接対応し、縁談は「幸ひ」なことであるが、宿世の拙さによって玉鬘の様子には憚ることがあると言う。そして玉鬘一行に邂逅した右近は、長谷寺において「幸ひあらせたとまつりたまへ」と玉鬘の幸運を祈願する。このように、玉鬘は「幸ひのなき」女君として形象された。

幼くして実母を亡くし、筑紫での受難を経て光源氏の養女となり、後に実父との対面を果たす玉鬘の先駆として、同様の経緯を辿った紫の上がいた<sup>13)</sup>。紫の上はその後、光源氏の正妻として繁栄し、「生けるかひありつる幸ひ人」(④御法238頁)と称されるほどに幸運を味方につけた。

玉鬘はその第二の紫の上となる可能性を秘めた女君であったが、物語は紫の上と同様の命運を辿らない。そこに玉鬘十帖における特徴があるだろう。真木柱巻において髭黒大将が玉鬘を略奪的に自邸に引き取った際、光源氏は六条院における玉鬘の不在を実感する。

三月になりて、六条殿の御前の藤、山吹のおもしろき夕映えを見たまふにつけても、まづ見るかひありてみたまへりし御さまのみ思し出でらるれば、春の御前をうち棄てて、こなたに渡りて御覧ず。…

「思はずに井手のなか道へだつともいはでぞ恋ふる山吹の花

顔に見えつつ」などのたまふも、聞く人なし。

(③真木柱394頁)

玉鬘を想起させる山吹の花を見た光源氏は、夏の町西の対へ赴く。この場面は、『伊勢物語』四段に

において、男は梅の花ざかりの頃、かつての女(二条后)のもとに通った場所で去年を思い出して泣いたことと同様の状況をふまえている。その女が住んでいたのも「大后の宮おはしましける西の対」であった。

「春の御前をうち棄てて」は、春の町を重んじていた光源氏本来の情動が露顕したことを表す。ひとときの間、並び立つ華やかさを競った春の町と夏の町であったが、玉鬘の消失により、夏の町の繁栄はこうして終わりを告げたのである。

## 6. おわりに

玉鬘の六条院退居は、若菜巻における六条院崩壊の予兆とみる説もある。しかし、紫の上は光源氏の玉鬘への思いを我が身に重ねて感じ取ることはあっても、それに対して苦悩することはなく、その立場は堅固に保たれていた。ここでは、六条院における玉鬘の存在意義について、積極的な意図をみとめるべきではないだろうか。

玉鬘は、明石の君と共通の軌跡を描いて六条院へと迎え入れられる。そして、もう一人の六条院の姫君、明石の姫君と同様の美質を有して、公達の関心を惹いた。そして時間差をもちながら、両者は裳着・入内の主題が並行的に描かれた。

玉鬘の存在によって、六条院における四方の町では、夏の町が俄に脚光を浴びることになる。春の町を中心とする六条院に、もう一つの光がもたらされたのである。

秋の町は秋好中宮の里邸としてあり、普段は主不在の町である。花散里や明石の君も、母・養母といった性格の強い女君であり、春の町の明石の姫君もまだ適齢を迎えていなかった。年若い女君が不在である物語の時点において、いつまでも光源氏の記憶に残り続ける夕顔の遺児、また紫の上にも比肩する可能性を秘めた美しい女性をめぐる物語が描かれたのである。

玉鬘は光源氏の娘として、また妻としての可能性をもつ境界的な存在であり、そのために周囲の公達や天皇をも巻き込んで、いつしか六条院の物語的中心は夏の町に据えられていく。このように、玉鬘物語は、六条院の陽極としての春と夏が並び立つ繁栄



の物語であるといえるのではないだろうか。

## 注

- 1) 以下、本文はすべて『新編日本古典文学全集 源氏物語』(小学館)による。
- 2) 吉海直人「乳母のいる風景—夕顔の乳母子右近を中心に」森一郎編『源氏物語作中人物論集』1993年1月、『源氏物語の乳母学—乳母のいる風景を読む』「右近の活躍」世界思想社 2008年9月
- 3) 三田村雅子『源氏物語との前後—今井卓爾博士喜寿記念』「源氏物語の視線と構造—召人の眼差しから—」桜楓社 1986年5月
- 4) 上坂信男『源氏物語—その心象序説』「海人と山がつと」笠間書院 1974年
- 5) 津島昭宏「明石の君と海人—光源氏との関わりにふれて」『人物で読む源氏物語 卷十二 明石の君』勉誠出版 2006年、また、海人と敗者の関わりについては、本田恵美「〈業平〉と〈海人〉—敗者文学としての『伊勢物語』」山本登朗・ジョシュア・モストワ編『伊勢物語—創造と変容』和泉書院 2009年
- 6) 日向一雅「流離する姫君・玉鬘」森一郎編『源氏物語作中人物論集』1993年1月
- 7) 高木和子『源氏物語の思考』「玉鬘十帖論」風間書房 2002年
- 8) 妹尾好信「玉鬘論—玉鬘物語の構想と展開」(『人物で読む源氏物語 第十三巻 玉鬘』勉誠出版 2006年)は、「当時まだ七歳の明石の姫君が成人するまでの隙間を埋めるかのごとく六条院のヒロインとして玉鬘が登場する」とする。
- 9) 吉海直人(前掲論文)では、「物語のヒロインに相応しく西の対に入居した玉鬘は、胡蝶巻・蛭巻において「対の御方」と呼ばれ、まさに明石御方並みの地位を確保したのである」とされるが、その実際はむしろ、紫の上に比肩する存在感をもって語られているといえよう。また、小山清文「玉鬘十帖における右近の意義—語り手・視点人物としての機能をめぐって—」(『国文学研究』100 1990年3月)は、竹河巻冒頭の髭黒方に住む女房である〈悪御達〉と右近の視点のあり方に注目し、玉鬘十帖において「巻が進むにつれて、玉鬘方の〈悪御達〉の語りが〈紫のゆかり〉の語りを圧倒して〈玉鬘物語〉を屹立させていく。たとえば、蛭巻の“物語”をめぐるところでも、源氏と玉鬘の対話場面が紫上の明石姫君養育の件を圧して中心を占めていて、常夏巻以下は、物語の主導権がほぼ〈悪御達〉の語りに委ねられて」おり、「〈語り〉という観点からすれば、〈紫のゆかり〉による語りそのものが竹河巻以前の第一部後半において既に相対化され始めている」とする。
- 10) 吉海直人(前掲論文)
- 11) 鶴飼祐江「「対の上」の呼称—特異な呼称の描くもの」『中古文学』85 2010年6月
- 12) 秋好中宮もまた「御幸ひのすぐれたまへりける」人物とされる。
- 13) 高木和子(前掲論文)

(受稿 平成28年10月19日, 受理 平成28年11月24日)